

# 馬はどんな夢を 見ているのだろうか

What Are Horses Dreaming About? from "Afterward" in Dawn, Run

『走れドトウ』「あとがき」より

橋田俊三＝文

Text by Shunzo Hashida

「ROUNDERS」創刊号における特集を完成させるにあたって、私たちは悩んでいた。調教についての特集であるにもかかわらず、調教師による競馬論が最後まで書かれずいたからだ。中央や地方競馬の大物調教師から新進気鋭、異色の調教師まで、両手に余るほどの調教師が候補に挙がった。そこからたった一人をお願いすると、決め手がなかなか見つからなかった。

一人の調教師が論じた競馬論はあくまでもその人固有の独特なものである可能性が高く（そんなこと言っていたらキリがないのだが）、それどころか、私たちが特集で論じたい「馬と話す男たち」というテーマから、かけ離れた主張が展開されるかもしれない。そういうわけで、私たちは、競馬論を誰にお願いするべきなのか、最後まで決めかねていた。ちょうどその折「走れドトウ」の「あとがき」を私たちは読んだ。読み終えた瞬間、調教師による競馬論は、故橋田俊三調教師（橋田満調教師の父）による、この「あとがき」しかないと感じた。最後のフンビースが見つかったのだ。故橋田俊三調教師は「走れドトウ」の執筆を通じて、馬と

話すことに真正面から取り組んだ。馬は何を考え、何を欲しているのか。馬を扱う人間たちにとって、永遠のテーマとなる難題に挑んだ。そして、サラブレッドの社会にはサラブレッドの文化があり、その文化が少しずつ、長い目で見れば大きく変化してきていることに気づいたのだ。

2010年のNHKマイルカップ。ダノンシャンティが府中のマイルを1分31秒4のタイムで駆け抜けた。たとえば50年前の日本の競馬に携わっていた者にとっては信じがたいタイムであろう。なぜサラブレッドはこんなにも速く走れるようになったのだろうか。血統の改良、調教技術の進歩、走りやすい馬場への改修など、様々な要因が挙げられるだろう。

故橋田俊三調教師はサラブレッド文化の変化という概念でこれを説明した。この驚くべき結論は、決してサイエンス・フィクションや素人の夢想などではなく、騎手、調教師として、40年以上にわたってサラブレッドと共に歩み、馬と話すことに真正面から取り組んだホースマンが辿り着いた結論なのである。だからこそ、ある種の切実さを持って、私たちの胸に響いたのだ。もちろん、あなたの胸にも響くはずである。

**私**がこの小説を書く気になったのは、優駿、編集長の宇佐美氏から、「競馬がこれだけ大衆化してきたのに、まだ馬の眼から競馬社会を書いたものがないのだが、どうだ、この道四十年の経験を生かしてそんなものを書いてみないか」などとけしかけられ、そのおだてに甘く乗せられたような恰好であった。

私は昭和十年、小学校を卒業すると同時にこの社会に入り、十三年に騎手として初騎乗した。現在私たちの社会ではもう古い語り草になってしまっている戦前騎手である。しかし、騎手としていちばん脂ののる年代を中支戦線で過ごし、復員、戦後も騎手、調教師の道を歩んで来た。調教師になってもう二十五年である。この自分の経歴が「専門家しか書けないんだ」という宇佐美氏の言葉に使命感のようなものを感じ、心が燃えながら書き続けた。

私は小説家ではないし、全くのシロウトといってもいいが、それでも書き進むうちに主人公「ドトウ」に自分が徐々に同化していくのを感じた。だから、日常、馬の運動や調教を見ている、いま馬は何を考えているか、何を欲しているかが、長年の調教師生活での習性とはいっても、改めて気がかかってきたのだ。（果して、厩舎人が良かれと思つてやっていることを、馬にしてみれば有難迷惑、と思っていないだろうか）などと自問してみた。

大体、厩舎人という人種は、こんなことを書けば叱られそうだが、計数に弱い叙情的な人種ではないかと思つている。だからこそ、言葉のない、それぞれ違った性質の馬と長い間付き合つてこれただと思つ。

私が、馬の社会にも馬の文化があるのではないだろうか？ と思ひ出したのは、主人公ドトウが臯月賞に出走する頃だった。深夜、宿直厩務員も寝静まった厩舎を見回りに行くと、寝言を言っている馬に気がついた。それも、それぞれが違った表現の寝言だ。小さな声で断続的に、もの哀しげに鳴いている寝言。あたかも腹を立てた相手に怒りを爆発させているかのように、横になって眠りながら前肢に力を入れて掻き、同時に後蹄で厩の板を蹴り、そのたびに怒声を上げている馬。また、静かに立



▶昭和52年に刊行された単行本『走れドトウ』（二見書房。もともとは、『わが輩は馬である』のタイトルで、日本中央競馬会の機関誌「優駿」に、昭和47年1月号、翌48年10月号の22回にわたり掲載された。

馬の社会にも馬の文化があるのではないだろうか？

馬はどんな夢を見ているのだろうか

『走れドトウ』「あとがき」より